南部六郎三郎殿御返事　　文永一〇年八月三日　　五二歳

鳥跡飛び来たれり、不審の晴ること疾風の重雲を巻いて明月に向かふが如し。但し此の法門当世の人上下を論ぜず信心を取り難し。其の故は仏法を修行するは現世安穏・後生善処等云云。而るに日蓮法師法華経の行者と称すと雖も留難多し。当に知るべし、仏意に叶はざるか等云云。但し此の邪難は先案の内なり。御勘気を蒙るの後、始めて驚くべきに非ず。其の故は法華経の文を見聞するに、末法に入って教の如く法華経を修行する者は留難多かるべきの由経文赫々たり、眼有らん者は之を見るか。所謂法華経の第四に云はく「如来の現在にすら猶怨嫉多し、況んや滅度の後をや」と。又五の巻に云はく「一切世間怨多くして信じ難し」等云云。又云はく「諸の無智の人の悪口罵詈等し刀杖瓦礫を加うる有らん」等云云。又云はく「悪世の中の比丘」等云云。又云はく「或は阿練若に納衣にして空閑に在る有らん。乃至白衣の与に法を説いて世に恭敬せらることを為ること、六通の羅漢の如くならん」等云云。又云はく「常に大衆の中に在って我等を毀らんと欲する故に国王・大臣・婆羅門・居士及び余の比丘衆に向かって誹謗して我が悪を説かん」等云云。又云はく「悪鬼其の身に入って我を罵詈毀辱せん」等云云。又云はく「数々擯出せらる」等云云。大涅槃経に云はく「一闡提羅漢の像を作し空閑処に住し方等大乗経典を誹謗すること有るを、諸の凡夫人見已はって皆真の阿羅漢是大菩薩なりと謂はん」等云云。又云はく「正法滅して後像法の中に於て当に比丘有るべし、像持律に似て少かに経を読誦し飲食を貪嗜し其の身を長養せん。乃至袈裟を服すと雖も猶猟師の細視徐行するが如く、猫の鼠を伺ふが如し」等云云。又般泥洹経に云はく「阿羅漢に似たる一闡提有り乃至」等云云。

予此の明鏡を捧げ持って日本国に引き向けて之を浮べたるに一分も陰れ無し。「或有阿練若、納衣在空閑」とは何人ぞや。「為世所恭敬、如六通羅漢」とは又何人ぞや。「諸凡夫人見已、皆謂真阿羅漢、是大菩薩」とは此又誰ぞや。「持律少読誦経」とは又如何。是の経文の如く仏仏眼を以て末法の始めを照見したまひ、当世に当たって此等の人々無くんば世尊の謬乱なり。此の本迹二門と双林の常住と誰人か之を信用せん。今日蓮仏語の真実を顕はさんが為、日本に配当して此の経を読誦するに「或有阿練若、住於空処」等と云ふは、建長寺・寿福寺・極楽寺・建仁寺・東福寺等の日本国の禅・律・念仏等の寺々なり。是等の魔寺は比叡山等の法華天台等の仏寺を破せん為に出来するなり。「納衣」「持律」等とは当世の五七九の袈裟を着たる持斎等なり。「為世所恭敬」「是大菩薩」とは道隆・良観・聖一等なり。世と云ふは当世の国主等なり。「有諸無智人」「諸凡夫人」等とは日本国中の上下万人なり。日蓮凡夫たるの故に仏教を信ぜず。但し此の事に於ては水火の如く手に当てゝ之を知れり。但し法華経の行者有らば悪口・罵詈・刀杖・擯出等せらるべし云云。此の経文を以て世間に配当するに一人も之無し、

誰を以てか法華経の行者と為さん。敵人有りと雖も法華経の持者は無し。譬へば東有って西無く天有って地無きが如し、仏語妄説と成るべきか如何。予自讃に似たりと雖も之を勘へ出だして仏語を扶持す。所謂日蓮法師是なり。

其の上仏不軽品に自身の過去の現証を引いて云はく「爾の時に一の菩薩有り常不軽と名づく」等云云。又云はく「悪口罵詈」等せらる。又云はく「或は杖木瓦石を以て之を打擲す」等云云。釈尊我が因位の所行を引き載せて末法の始めを勧め励ましたまふ。不軽菩薩既に法華経の為に杖木を蒙りて忽ちに妙覚の極位に登らせたまひぬ。日蓮此の経の故に現身に刀杖を被り二度遠流に当たる。当来の妙果之を疑ふべしや。如来の滅後に四依の大士正像に出世して此の経を弘通したまふの時にすら猶留難多し、所謂付法蔵第二十の提婆菩薩・第二十五の師子尊者等或は命を断たれ頸を刎ねられ、第八の仏駄密多・第十三の竜樹菩薩等は赤き旗を棒げ持ちて七年十二年王の門前に立てり。竺の道生は蘇山に流され法祖は害を加えられ、法道三蔵は面に火印を捺され慧遠法師は呵嘖せられ、天台大師は南北の十師に対当し、伝教大師は六宗の邪見を破す。是等は皆王の賢愚に当たるに依って用取有るのみ、敢へて仏意に叶はざるに非ず。正像猶以て是くの如し、何に況んや末法に及ぶにおいてをや。既に法華経の為に御勘気を蒙れば幸ひの中の幸ひなり。瓦礫を以て金銀に易ゆるとは是なり。但し歎きは仁王経に云はく「聖人去る時七難必ず起こる」等云云。七難とは所謂大旱魃・大兵乱等是なり。最勝王経に云はく「悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に星宿及び風雨皆時を以て行なはれず」等云云。愛悪人とは誰人ぞや、上に挙ぐる所の諸人なり。治罰善人とは誰人ぞや、上に挙ぐる所の数々見擯出の者なり。星宿とは此の二十余年の天変地夭等是なり。経文の如くならば日蓮を流罪するは国土滅亡の先兆なり。其の上御勘気已前に其の由之を勘へ出だす、所謂立正安国論是なり。誰か之を疑はん、之を以て歎きと為す。

但し仏滅後今に二千二百二十二年なり。正法一千年には竜樹・天親等仏の御使ひと為って法を弘む、然りと雖も但小・権の二教を弘通して実大乗をば未だ之を弘通せず。像法に入って五百年に天台大師漢土に出現して、南北の邪義を破失して正義を立てたまふ。所謂教門の五時・観門の一念三千是なり。国を挙げて小釈迦と号す。然りと雖も円定・円慧に於ては之を弘宣して、円戒は未だ之を弘めず。仏滅後一千八百年に入って日本の伝教大師世に出現して、欽明より已来二百余年の間六宗の邪義之を破失す。其の上天台の未だ弘めたまはざる円頓戒之を弘宣したまふ。所謂叡山円頓の大戒是なり。但し仏滅後二千余年三朝の間数万の寺々之有り。然りと雖も本門の教主の寺塔、地涌千界の菩薩の別に授与したまふ所の妙法蓮華経の五字未だ之を弘通せず。経文には有って国土には無し、時機の未だ至らざる故か。仏記して云はく「我が滅度の後、後五百歳の中に広宣流布し閻浮提に於て断絶せしむること無けん」等云云。天台記して云はく「後五百歳遠く妙道に沾はん」等云云。伝教大師記して云はく「正像稍過ぎ已はって末法太だ近きに有り、法華一乗の機今正しく是其の時なり」等云云。此等の経釈は末法の始を指し示

すなり。外道記して云はく「我が滅後一百年に当たって仏世に出でたまふ」云云。儒家記して云はく「一千年の後仏法漢土に渡る」等云云。是くの如き凡人の記文すら尚以て符契の如し。況んや伝教・天台をや。何に況んや釈迦・多宝の金口の明記をや。当に知るべし、残る所の本門の教主妙法の五字、一閻浮提に流布せんこと疑ひ無き者か。

但し日蓮法師に度々之を聞きたる人々猶此の大難に値っての後之を捨つるか。貴辺は之を聞きたまふこと一両度、一時二時か。然りと雖も未だ捨てたまはず御信心の由之を聞く、偏に今生の事に非じ。妙楽大師の云はく「故に知んぬ。末代一時に聞くことを得、聞き已はって信を生ずること宿種なるべし」等云云。又云はく「運像末に居し此の真文を矚る。妙因を植えたるに非ざるよりは実に遇ひ難しと為す」等云云。法華経に云はく「過去に十万億の仏を供養せし人、人間に生まれて此の法華を信ぜん」と。又涅槃経に云はく「熙連一恒供養の人此の悪世に生まれて此の経を信ぜん」等云云取意。阿闍世王は父を殺害し母を禁固せし悪人なり。然りと雖も涅槃経の座に来たって法華経を聴聞せしかば、現世の悪瘡を治するのみに非ず四十年の寿命を延引したまひ、結句無根初住の仏記を得たり。提婆達多は閻浮第一の一闡提の人、一代聖教に捨て置かれしかども此の経に値ひ奉りて天王如来の記莂を授与せらる。彼を以て之を推するに末代の悪人等の成仏不成仏は、罪の軽重に依らず但此の経の信不信に任すべし。

而るに貴辺は武士の家の仁、昼夜殺生の悪人なり。家を捨てずして此所に至って何なる術を以てか三悪道を脱るべきか。能く能く私案有るべきか。法華経の心は当位即妙・不改本位と申して罪業を捨てずして仏道を成ずるなり。天台の云はく「他経は但善に記して悪に記せず、今経は皆記す」等云云。妙楽の云はく「唯円教の意は逆即是順なり。自余の三教は逆順定まるが故に」等云云。爾前分々の得道有無の事之を記すべしと雖も名目を知る人に之を申すなり。然りと雖も大体之を教ふる弟子之有り。此の輩等を召して粗聞くべし。其の時之を記し申すべし。

恐恐謹言。

文永十年太歳癸酉八月三日　　日　蓮　花　押

甲斐国南部六郎三郎殿御返事

鎌倉に筑後房・弁阿闍梨・大進阿闍梨と申す小僧等之有り。之を召して御尊び有るべし、御談義有るべし、大事の法門等粗申す。彼等は日本に未だ流布せざる大法少々之を有す。随って御学問に注し申すべきなり。